

五色百人一首 (ピンク 20首)

※すきなくをみないでいえるようにかんしゅうしよう。

山部 赤人
田子の浦にうち
出でて見れば
白妙の
富士の高嶺に
雪は降りつつ



権中納言定家
来ぬ人を
まつほの浦の
夕なぎに
焼くや藻塩の
身もこがれつつ



祐子内親王家紀伊
音に聞く
高師の浜の
あだ涙は
かけしや袖の
ぬれもこそすれ



源宗于朝臣
山里は
冬ぞ寂しき
まさりける
人目も草も
かれぬと思へば



藤原清輔朝臣
承らへば
まだこの頃や
しのぼれむ
憂しと見し世ぞ
今は恋しき



藤原実方朝臣
かくとだに
いぶきの
さしも草
さしも知らじな
燃ゆる思ひを



源重之
風をいたみ
岩打つ波の
おのれのみ
くだけて物を
思ふころかな



文屋康秀
吹くからに
秋の草木の
しをるれば
むべ山風を
嵐といふらむ



藤原興風
誰をかも
知る人にせむ
高砂の
松も昔の
友ならなくに




前中納言匡房
高砂の
尾上の桜
咲きにけり
外山の霞
立たすもあらなむ



陽成院
筑波の峰
よりの落つる
男女川
恋ぞつもりて
淵となりぬる



西行法師
嘆けて
月やはものを
思はする
かこ顔なる
わが涙かな



天智天皇
秋の田の
かりほの庵の
とまをあらみ
わが衣手は
露にぬれつつ



相模
恨み他ひ
干さぬ袖だに
あるものを
恋に朽ちなむ
名こそ惜しけれ




中納言行平
立ち別れ
いなばの山の
峰に生ふる
まつし聞方は
今帰り来む




平兼盛
しのぶれど
色に
出でにけり
わが恋は
物や思ふと
人の問ふまで



大弐三位
有馬山
猪名の笹原
風吹けば
いでそよ人を
忘れやはする



前大僧正行尊
もつとも
あはれと思へ
山桜
花より外に
知る人もなし



皇太后宮太夫俊成
世の中よ
道こそなけれ
思ひ入る
山の奥にも
鹿ぞ鳴くなる



待賢門院堀川
長からむ
心も知らず
黒髪
乱れて今朝は
ものをこそ思へ



ナガからむ
ニミもしらす
うかみの
みだれてけさは
ものがこそおもへば
とくだは下かく
かいて